

11月22日

全体討論

パネラー：王 維坤
李 浩
土屋 昌明
田島 公
司 会：松原 朗
土生田 純之
飯尾 秀幸

土生田：それでは討論に移りたいと思います。それから、昨日の発表と今日の発表、当然つながりがあるわけですので、昨日発表していただいた諸先生方にもすぐ聞けるように前の方に控えていただいております。今日の発表にしたがって、午前中の中国の先生に関するご質問の中から、たくさんいただいておりますので、こちらで僭越ながらまとめさせていただいて、そのご質問への回答あるいは補足をさせていただきたいと思います。では、当方の松原が司会をさせていただきます。

松原：それでは王維坤先生、そして李浩先生のご報告への質問から始めさせていただきたいと思います。まず王維坤先生に、和同開宝（玠）についてのご質問が一番多くなっております。もうひとつは遣唐使について、例えば、吉備真備の父とその弟が702年の使節で入唐した可能性はないのではないか。あるいは同じ趣旨になりますが、下道囿勝と囿依の兄弟二人が日本の第七回遣唐使団に従って長安に行って、かつ武則天の招待宴会に出席したことがあるという、そういうことは史料的な裏づけがありますかとの質問がきております。このことにつきまして王維坤先生のお考えをお聞かせいただきたいと思います。

王：この質問はもの凄く重いですね。今までそのような考え方はありません。吉備真備の父とかおじについての手掛かりは一つしかありません。「囿」という言葉ですね。この武則天の文字、十八字ですけど、689年の5月から6月の間に作られたものです。武則天は705年に亡くなりました。この人が亡くなると、この「囿」という字は、一切使われなくなりました。氣賀澤先生が唐代の墓誌目録を集成されました。その中には九千以上の墓誌があります。実は、近年収集したのを含めれば一万三千くらいになっているかもしれません。もし吉備真備のお父さんとおじさんが中国に行かないと、この「囿」の文字に変えることができない。言い換えれば、彼らは702年に行って滞在した第七回の遣唐使の一員として参加した可能性もある。これは「囿」という字を手がかりとして推測したものです。

松原：今のお答えは、則天武后が705年の1月に退位というかあるいは死去したその直後から、この字が中国では一切使われなくなっている。それが何故日本で使われたのかということを見ると、一番確実であるのは、彼らは中国に行ったということになるという、王維坤先生の推測でございます。なお、これは重要な問題ですので、もしこのことにつきまして、更に根拠をもって何かご質問なされたい方がいましたら、会場からお願いします。

鈴木靖民（以下、鈴木）：昨日報告した鈴木靖民です。那須の国造のことを書いた栃木県的那須国造碑石に永昌元年とあります。永昌という元号も、武則天の時の元号ですね。それは遣唐使が実施されていない空白期ですから、新羅経由でその文字が入ってきている可能性が論じられています。私も昨日誰かが引用してくださったものに文章を書いています、東野治之さんなどの詳しい研究があります。ですから、王維坤先生の701年に任命されて702年の遣唐使が周代の唐に渡って、初めて則天文字に接したという可能性は高いと思いますが、それ以前に日本に則天文字が伝わっていた可能性がある証拠があります。

フロア（藤田）：則天文字が、日本でほとんど同時期に使われたということについて、これは今お話があった新羅経由というのがありますけれど、例えば702年に遣唐使で行った連中がもって帰った文字をそのまま伝えたと考えられる。遣唐使の目的が色々な文物を持ち帰ることですから、新しい字が出たというのは大変な情報だったと思うんです。それを真似た。たまたま罔勝・罔依の場合、「罔」という字が変わったというので、後日変えた可能性は私はあると思います。つまり吉備真備のお父さんとおじさんは、たぶん行ってない。それは質問用紙にも書いたのですが、そうした記録が全然ないということ、702年の遣唐使の主要なメンバーに入っていない。吉備真備のお父さんは下級官僚ですから、もし行ったとしても名前が載らなかった可能性もあるんですけど、それよりも私が一番考えたのは、吉備真備が亡くなった時、『続日本紀』の薨伝が、確か、かなり詳しく彼の経歴を書いております。その中に、お父さんが入唐したっていうのが全然書いてない。それ以外にも、本朝で唐に行って名をあげたのは、吉備真備と朝衡だけである、つまり仲麻呂だけだと、そういうこともその薨伝の中に書いてあるわけです。非常に詳しい薨伝の中です、お父さんの入唐について書いてない。だから私は、入唐はしていなかったが、なんらかの情報でお父さんとおじさん、この二人が名前を変えた可能性が高い。以上です。

王：いい質問ですね、ありがとうございます。私の今の考え方では、文献は後で書いたものもあります。しかし問題は骨蔵器の年代、708年です。もしお父さんとおじさんが唐時代の中国に行かなければ、自分の名前を他人が変えることになります。これはたぶん無理でしょう。武則天の文化を受け入れたために、わざわざ武則天の文字に変えたのでしょうか。今も審議中ですが、やはりこの骨蔵器が関係しています。これは本物ですね、708年の年号です。鈴木先生のご意見をお聞きしたいのですが。

鈴木：直接の証拠が無いですから、王先生の説の可能性はゼロではないと思いますが、他に既に

入っていた可能性がある、既に遣唐使の任命以前に入っていた可能性があるということ、さっき碑文で申し上げたまでです。

土生田：今の話に関連して、この論争はまだ沢山問題がありますのでおいておきますが、一つだけ私の考古学の立場で申しますが、栃木県下野に新羅土器が大量に出てくるところがあります。それから文献で、新羅の人をそこに住ませたという記事があります。これは則天文字とは関係ないのですが、たとえば群馬県上野には甘楽郡があつて、これは唐から来た人が沢山住んでいたところであることが考古学的な実証ではっきりしております。あるいは、岡山にも伽耶郡というものがあります。そういった王権の直接的なものではない渡来、そういったものも沢山あります。ただ、今日のテーマは、公的なものでございますから、そこにしぼってお話している、ということでありまして、その他の私的な交流がなかったというようなことはどなたも思っていないと思いますが、公的なことを考える時には私的なものも当然合わせて考えていく必要があるかと思えます。そうした意味で、私的な交流というのは、私ども考古学に主にお任せいただきたいという宣伝をさせていただきました。

松原：では、続けさせていただきます。王維坤先生に対して、和同開宝・和同開珎、これについて質問数としては実は一番多いんですけども、このことを取り上げたいと思います。中には、例えばこの「寶」という字は、画数が多すぎるから鑄造する時に大変だから略字化したんじゃないかとありまして、ありうることもかもしれません。そういうようなことで、非常に賛同できるという意見もございます一方で、その「珎」という字は中国のその当時の字書である、『干祿字書』にも既に登録されている。つまり、字書に正式に登録されている字であるから、略字として使われたのではなくて、つまり「宝」の略字ではなくて、「珎」という字で使われているに違いないと質問なさっている方がいらっしゃいます。つまり、「カイチン」と読むしかないということですが、これにつきまして王先生のお答えをいただきたいと思えます。

王：この和同開珎の場合は、正倉院にも史料があります。この「珎」、「宝」について以前に沢山の例をあげましたが、これは文字の間違いではない。中国では宝の文字は、色んな貨幣に使われています。古代の日本人は、唐時代の開元通宝を模倣して作ったもの。午前中に話しましたが、この「開」という字は有名な書道家が書いたもので、その文字は中国と日本とでそっくりです。やはり私は開宝はお金と関係があると思えます。もしお金と関係がない場合で、開の字がなくお金と関係ないときは、これを「珎」と読んでもよろしい。しかしこのように開の字があるお金の場合は、「珎」は「宝」であると考えます。どうでしょうか。

松原：王維坤先生のご回答を少し補足しますと、ここの開くという字は、歐陽詢の字形を正確に模写している、継承しているわけですから、ちゃんとした意図をもってその字を選んでいるはずであるということ。開の字を含む通貨の場合には、珍しいという字は使いにくいんじゃないか。ですから「寶」の略字としての「珎」であり、つまり和同開宝であるという、開の字を一つの根

拠とすることが王先生の意見・ご回答ということになります。氣賀澤先生、このことについてどのようにお考えになりますか？

氣賀澤保規：明治大学の氣賀澤と申します。私達が習った頃は和同開珎と言っていたと思うのですが、途中から「開宝」と言ったと思うのですけれど、今は開珎に変わってるんですよね。基本的に私は王維坤先生の意見でいだろうと思います。やっぱりこの「寶」という難しい字、この字を使いきれないという問題があるというのと、同じく「同」という字も金へんが本来つくはずなのに、ここではついていないこともありますので、当時における日本の形、日本のレベルからいったら、「寶」を略した形で表したとみていいのではないかと思います。ついでに申しておきますと、さっきのあの王先生の則天文字の件ですが、実は王先生の「圀」という字の説明について、それだけの説明でいいのかという問題があります。と申しますのは、この銘文全体を見ますと実はいっぱい他に則天文字にあたる字があるんですね。たとえば人という字とか年・月とか日とか全部、これは則天文字を使っていない。「圀」という字だけ使っている。それは何故か、という別の要素を入れて考えないとここは課題が多いのではないかと思います。

松原：どうもありがとうございました。

フロア：私は銅を作る会社に勤めておりまして、意見を言います。やっぱり「寶」という字は鑄造で綺麗に出すのは難しかったと思うんです。和同開珎・開宝、私は小学校の時には和同開宝と習い、大学で和同開珎と習いました。だけど、技術的に言いますと、純粹の銅、純銅というものは、いわゆる湯流れっていうんですけど、湯の流動性が悪くて非常に難しいものなんです。それを鑄造するためには、銀を入れまして酸化を防ぐんです。銅の中に、酸素が溶けて中に混じってしまって、それで非常に質が悪くなるので、今は銀を入れております。例えばあの、古いといわれる富本銭というものがありますが、富士山の「富」に、それから「本」という字ですね。その「本」という字は、「大」の下に「十」と書きまして、嘘字が書いてあるわけです。富本の方には、恐らくあの部分に、筋が5本交わるわけですから、鑄出しにくかったんだと思います。そして奈良の菅原っていう所で富本銭の工場が出たといわれました。多数の富本銭が出たんですけど、ことごとく不良品だったわけです。そして、同じく炭の粉がいっぱい出た。炭の粉は恐らく酸化を防ぐ努力をしたんでしょう。炭の粉をかけたが、うまくいっていないんです。では何故和同開宝がうまくできたのかというと、これはまあ冗談に近いんですがね、鑄銭司、お金を作る工場の親方が、秘伝として銅の溶けたところへネズミを五匹くらいぶっこんじゃうとかですね、そしたら銀が出てきて酸化が防げるとか、そういうノウハウ、おまじないのノウハウがないとうまくいかなかったんじゃないか。実際に和同開珎を含めて皇朝十二銭の分析をやった方がいるんですけども、そこから出てきたものは、やっぱり彼らが純銅を目指したというか、若干の不純物はあるものの、ほとんど純銅の鑄物も出てきているわけです。だから、他のお金がうまくいったこともちょっと不思議に思います。

王：和同開珎、実は、開元通宝、日本の和同開珎は開元通宝を模倣して、特に宝の文字を模倣して造ったものと結論しているのは、私だけじゃないのです。1972年に西安で、金で造った和同開珎が見つかりました。普通は青銅で造る。金で造ったのは記念すべき貨幣で、流通させるものではない。ですから、資料の三番ですね、郭沫若が書いた論文がありますが、これに私は賛成しています。「圜」という字については、私が初めていうのですが、文字の真ん中は八方です、文章にも辞典にも書いてないのですが、八方はやっぱり中国語で、四方八方の省略で、武則天は、圜という字を、大華、全中国という意味として、この字に統一するためにわざわざ作りました。よろしいでしょうか。

フロア：『続日本紀』を見ますと、もうだいぶ後になってからですけど、お金の文字がうまく鑄出されていないとか、鑄物でうまく出てこない。それで選銭、すなわち使う人が、文字がいい加減なのは使いたくない、もらいたくない。それで綺麗なのをよこせということになるわけです。それについて政府が指示したのは、和同開宝ならその四字のうち、一字でもクリアにできていれば、それは通用させるというのが出てきます。そういうことで、不良品は相当あったんじゃないでしょうか。

松原：王先生についてのご質問色々とききないところがあるんですが、あと残り三先生に対するご質問がございますので先に進んでいきます。李浩先生につきましても、ご質問をいただいております。そのうちのいくつかを整理させていただきます。極端な華化、要するに中国化・中華化というものを推し進めたものとして、北魏や清朝がありますが、それは何故なのかお考えがあったならば教えていただきたいというものです。

李：非常に素晴らしいご質問だと思います。北魏も満清、我々は満族の清を満清と呼びますが、そうした異民族が中国の中原地域に入った時はやはり武力で征服をしていった。鮮卑族や満族は非常に戦闘能力のある民族性を保持していたわけですが、その後、漢族と同化する過程において、北魏の鮮卑族などは特に、漢族との通婚を奨励していくことになっていきます。満族の方も、当初こそ非常に武力を保持して、ヌルハチが入ってきた頃の満族というのは非常に強く、尚武の民族だったと思うのですが、次第にかつての軍事力を喪失していった。こういった民族が軍事力・戦闘能力を喪失すると、もうひとつの極端な方向へ走るわけです。要するにかつて戦闘能力が強ければ強かったほど、中原の文化に同化しようという方向に振れるのでしょうか。戦闘能力が強かった民族ほど、中国化・漢族化の傾向があったのではないかと思います。もちろんあの、鮮卑族と満族との間には区別があったと思われませんが、大筋においてそういうことが言えるのではないかと思います。

松原：関連する質問で、そのような極端な中華化・華化を北魏というか北朝が目指したわけですが。李浩先生の言葉を借りますと、非常に強い軍事力によって北中国を制圧したその北朝が、次第にその軍事力を失うにしたがって中華化を推し進めていくということなんですが、その北朝から興

った隋・唐が何故その極端な中華化ということに進まないで、李浩先生の言葉で言うと国際化、包容力のある多様性を抱擁する方向に向かったのか、何故極端な中華化を目指した北朝から興った隋・唐がその道を辿らずに別の道を辿ったのか。このことについて、李浩先生のお考えをお尋ねしたいということです。よろしくお願いします。

李：このご質問も大変素晴らしいものですし、答える者にとっては非常に難しい課題でもあります。確かに鮮卑族の血統が血液の組成から見ると唐の李氏に近いものがあるということは、生物学の見地からいえるものですが、それだけでは関係を結論付けることはできないと思います。広く、文化の角度から、なぜ唐王朝が強大となり国際化を成し遂げたかということについて、以前から学者たちがいくつかの理由があると言っております。そのうち陳寅恪は、主に唐が国際化を実現した理由として、唐以前の中国にあった国家を三つに区分して挙げております。一つは北齊、二つ目は陳・梁で、三つ目は西魏・北周です。この三つの地域の場合では、二番目の梁や陳は南方の文化を多分に含む地域である反面、西魏・北周は、洛陽地域を包括する文化圏であった。したがって唐以前の段階で、ある程度の国際化が進んでいたのではないかという意見は確かにうなずけるのですが、この時代に欠けていたものはやはり大国でした。小国で変化がやまない五胡十六国という時では、安定した政権が統一性をもって国の文化を国際化していくのには恐らく困難があったであろうと思います。鮮卑族が李唐の祖先であるとの結論付けがよく言われるようになってきましたが、一概にそればかりとも言い切れない、というのが私の考えです。

松原：どうもありがとうございました。中国に三つの地域がありまして、北朝最後の頃には長安を中心にする地域で西魏・北周がある、そして洛陽を中心にする北朝系のものとしては東魏・北齊がある。そして南朝系の梁・陳がある。結局その三つの源というものを統合する形で、隋・唐が成立してくるわけだから、実はその国家の成立の中で異質な文化を内在させているということ、李浩先生は今ご説明なさったわけですが、そういう趣旨で既に大著を先生は著されておられます。単純に隋や唐の王族の血の中に異民族の血が流れているから多様性を包含するというような理解の仕方は適当ではない。むしろ隋・唐というものが異質なものから成立しているが故に、さらに異質なものを受け入れることについて包容力をもっていたと考えるべきだというのが李浩先生のお考えということになります。

土生田：まだ色々承りたいことがあろうかと思いますが、次に移させていただきます。土屋先生の大変興味深いお話でしたが、後半で新羅の人を例にとられて随分お話なさいました。前日の濱田先生とお二人にお伺いするということになりますが、新羅の金城、現在の慶州ですね、この慶州盆地の西側に仙桃山という山がございます。名前からしていかにも道教的な名前でございますけれども、こういったところに道教の道観というんでしょうか、そういった遺跡があるのかなのか、あるいは新羅で道教はどれほど受け入れられていたのか、お二人にお伺いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

土屋：新羅の時に道観があったかどうかということなのですが、その名前からすると、確かに仙人の仙という字がついていて、そういう話は他にもありまして、確かに道教が関わっていると考えられるかと思うのですが、仙桃山の場合も、これは『三国史記』だったかな、仙桃聖母っていうのがいまして、それが神仙の術を得ているという話で、明らかに神仙思想や道教との関わりが考えられます。実は私も話の中でこの話に触れるべきだと思っていたんですが、正直言って、神仙の話というのは道教と関わりなく、当時の知識人・知識層、文字が読める人達は文献から学んでるんですね。中国もそうで、例えば王維とかその他の有名な詩人でも、そういう仙人の伝説とかを使って文を書いたりしています。それではそういう人達は道教の信者だったのかということになると、別の話になるということなんですね。ですから、まず仙桃山の方に道観があったかどうか、史料では、お寺があったことは確かだと思うのですが、それが道観だったのかということになると、ちょっと難しいかな、と。わかりかねると思います。それがその道教だったのかってことになると、恐らく道教と考えるよりは、神仙のそういう伝説、仙人思想、仙人・神仙思想というものが、道教という宗教とは別にですね、一種のロマンチックな説話として伝わったものじゃないかなという風に思います。

濱田耕策：マイクをいただきましたので、土屋先生にちょっと一つ二つ。あの、レジメ4ページ目の高句麗に道教がおおいに入ったというようなことの文脈のなかで、この上のほうに似先氏と造像碑にみえる。これは高句麗の姓なのということですが、私は、あれ、高句麗に似先っていう姓があったかなとちょっと頭をひねったんですが、出てこないんです。何か根拠があるのか、あるいはこの地域は、もっと鮮卑その他色々移住してきているだろうという思いもいたしますが。似先氏が高句麗の姓なのかをちょっとあとで教えていただきたいということ。今の、新羅に道教がどうだったかということはこのレジメ10ページに書かれておまして、先程の仙桃山というのは慶州の太宗武烈王陵のすぐ上に聳えているお山ですが、現在はそこには小さな寺院といいましょうか、仏教的な施設とそれから磨崖仏がありまして、じゃあ仙桃という名前はいつの時代から命名されているか、これがどこまでさかのぼれるかということですが、新羅時代までは遡れない。まあ確たる証拠がないのでなんとも言えないということですね。それから新羅と道教の関係では、この高句麗に道教、すなわち『道德経』を唐からいただいたと、これは確かでしょうが、新羅の時代には、6世紀の始めから新羅は護国仏教が盛んでありますし、それから独特の神宮のお祭りというのが国家祭祀として入って定着しております。したがってそれらとの関係で公の立場で道教を祀られたか、尊崇されたかどうかということの検討が求められると思いますね。国家のための消災・祈福、仏教でいえば仁王会も行ってあります。百座講会という仏教的な国の災いを祓うという仏教儀礼も行われてありますし、神宮という天の神を祀る儀式も行われてありますから、これらとの関係で、新羅は、私はちょっと公の立場では道教は導入されていないだろうとの見通しを持ちます。それから、金可記についてですが、土屋先生は中国文学でありますからご存知だと思いますが、日本の『千載佳句』という漢詩集、短いものですが、あの中に確か金可記の句が数点残っていると思います。伝記の中、先程の墓誌銘の中でも彼が非常に文をよくしたということが書かれておりますので、それにあたるかなと思います。以上です。

土生田：土屋先生何か……。

土屋：まず、似先氏が高句麗の名字だという話は、鄭樵『通志』によって、そう考えました。それから、金可記なんです、金可記が作ったと言われている詩が、実は二種類あって、それは今ご指摘になった通りです。それは今回取り上げなかったのですが、私の説明だけですと、金可記は実在の人物じゃなくて伝説上の人間じゃないかという感じもするのですが、今先生が言われたように詩が残ってまして、それは中国の、唐の人が金可記が新羅に帰る時に贈る送別の詩を書いています。しかもその詩を作った人が、それほど有名な詩人じゃないんですね。だからむしろ逆にその詩は本当に存在した、ということの意味するのかなと思います。

土生田：どうもありがとうございます。時間が迫っておりますので、田島先生に質問をさせていただきます。田島先生にもいくつかありますが、私の方でまとめさせていただきます。遣隋使とか遣唐使が書籍を体系的にといいますか、選んで持ってきたというのはわかるとして、それを、指図するというか、そういったセクション、そういった役所あるいは人はどうだったのか、遣隋使・遣唐使に全て任せたのかどうか。あるいはそれ以外の、公的でない私的な購入があるのではないか。もちろん、遣隋使・遣唐使でなくて博多で入手するとか、もうちょっと後の時代にはいっぱいあるのですが、ここは遣隋使・遣唐使を考える会でございますから、それをまず優先してやっているわけでございます。それを含めてお答えを願います。

田島：そういう書籍を担当するとしたら、図書寮というところがございまして、その図書寮の宝庫に色々な典籍、仏典とかが集まりましたので、そういうところの役人も考えられるかもしれませんが、具体的に史料上どういう組織があったというよりは、私は当時の天皇とか貴族とかで、そういったかなりの文化人といえましょうか、相当な知識をもっていた、最先端の人と考えます。最初にも申しましたように、当時は今のような自由な交易ではなくて、国家が貿易なり情報を独占していたわけなので、そういう最先端の知識は王権の中枢の人、まさに天皇や聖徳太子のような人達が、かなりいろんな知識を持っていたのではないかなと考えます。二番目のご質問に関しましては、やはり私的な交易というのが9世紀の後半以降に盛んになってきますので、それまでは先程申しましたように中国からいろんな本を持ち出すにしろ、様々なチェックが入るわけですね。現在の日中間では自由な、比較的自由的な交易、往來が行われていますが、やはり当時としては自由な交易ができませんし、日本国内でも、使いを送る、護送したりする場合は、日本人と外国人との接触を禁じているわけですね。それから、私が大宰府の鴻臚館のことを書いた時も、鴻臚館とかそういう客館は「ムロツミ」と言われますが、それは外国の使いの人が来た時に、やはり接触しないようにしています。つまりそれは、先程土生田先生が言われたように、博多とかそういうところでいろんなものを持ち出すということをされると、大和とか、平城京と平安京にあった王権のもとに届かないということになるので、9世紀以降はそういうことが起こっていますけれども、やはりこの遣隋使・遣唐使の時代は、派遣された回数も少ないわけですから、そういう意味でかなりチェックが行われていた。1、2冊はそういうことがあったかもしれませんが、

そんなに大量の私的な交流というものはなかったと私は考えます。

土生田：まだまだ、壇上の先生方に聞きたいこと、あるいは承っている質問はあるんですが、時間も迫っております。ここで昨日の先生方と合わせた全体に関する問題を飯尾の方からご紹介して、それぞれの先生にお答えいただきたいと思います。

飯尾：すみません、17時30分に終わる予定ですが、もう少し時間をいただきまして、45分くらいをめどに終わりたいと思います。で、その割にはちょっと重い話題というか、困ってしまうのですが、大事なものは二つです。私達にはいろんな柱があったのですが、留学生が具体的にどういうものを持ってきたのか、あるいはそれがその国の中でどういう役割を果たしたのか、という事実の問題ですね。もう一つは、そういった留学生を呼び寄せる、あるいは相互に交流するという状況の中でできてくる東アジア世界というのは一体どういうものとして考えることができるのか、あるいは東アジア世界というもので果たして考えていいのか、それは有効なのか。そこには西アジアとかも考えた方が良くはないかという、特に東アジアっていうように限定していいのかという問題が出てきておまして、東アジア史、あるいは東アジア世界の有効性ということを私達はずっとこここのところ考えてきています。どうしてもそちらの、ちょっと抽象的な話になってしまって恐縮です。さらに、このことについて広くフロアの方からいろんな意見をいただきたいところなのですが、時間がないために、ここは昨日ご報告いただいた先生方と、それから今日ご報告いただいた先生方との間で基本的にはやり取りをするという形になってしまいます。そのうえで少し時間ありましたら皆さんからということになりますが、恐らくなくなってしまうのではないかなと思っています。最初にちょっとおことわりします。ご了承ください。

まず東アジア世界論の有効性ということですが、最初はやはり、今回も何度も出てきました冊封体制論から議論したいと存じます。近年では冊封体制論に対する批判がでていまして、私たちのプロジェクトでも、留学生というものが実際にどう位置付けられ、働きをして、それをどのように評価するかというのを最終的な問題にしているわけですが、その関係を、冊封体制を相対化するという前提に立って、それ以外のものを探していこうということで始めているわけです。しかし同じ私達のプロジェクトの研究者である土屋先生が、私から言わせると冊封体制再評価論といったらいいでしょうか、高句麗あるいは新羅が道教を導入するには冊封体制というものがかかなり大きなウェイトを占めていたという話を今日されたわけです。それについて、昨日ご報告された濱田先生にご意見を伺いたいと思います。

濱田：私なりにまとめを理解しますと、外交交渉とですね、これは冊封される新羅・高句麗・百濟、あるいはその冊封を受けない日本、そういう中国と東アジア、東アジアの3国、4国が、冊封を受ける受けないというような関係の中で、特に『道德経』その他であります、書籍がどのように受け入れられるのかを考えますと、冊封を受けるところでは下賜と、賜い物ということで中国の方から与えられるという関係にあります。しかし日本の方では今日の田島先生の話など、少し時代は下るにしても、かなり選択的というか、ある程度の図書目録といいたいでしょうか、リ

スト、算段をつけてそして求めていくということもみられるわけです。そういうところで、冊封を通して図書をあげるということは、土屋先生のレジユメの10ページにもありますように、中国と高句麗とが図書を通して価値観なりを共有するという働きがあるということでもあります。またそれを受け取った高句麗の方はある時は、外交的に道教を利用するというか、確か隋の遠征軍の遺骨、捕虜だったかな、あるいは唐の遠征軍の捕虜だったか、その捕虜の遺骨の上に道観を造るという、まあそういうことをやるわけですね。これはやがて唐の方が交渉して、その道観を撤去させるというような外交もありましたので、一律に冊封という上下関係の中で同心円的に、あるいは文化が流れる、あるいは上から下へ水が綺麗に流れていくというような関係のみではないということ、しっかり押さえなければいけないのではないかと思います。

飯尾：ありがとうございます。その辺について、土屋先生いかがでしょうか。

土屋：本日、私が取り上げた朝鮮、高句麗や新羅の史料は、ここにあがっているのがほぼ全てなんです。これを見た範囲では、やはり冊封体制の関係で考えた方がわかりやすいかなという、私は史料的にはそう思っています。ですから、全体的な観点から、飯尾先生が言われたような観点でもう一回考え直すってところまで私の考え方が至っているわけじゃないんですね。それから今お話があった、戦争で亡くなった人達の上に道観をとのことですが、先生、あれは京観とは書いてありますけど、道観とは書いてないと思うのですが。いずれにしても、書籍のやりとり、経典のやりとりというのが、外交関係の中で出てくるのが注目されるということです。ただ、今の史料ではなかなかそれはよくわからないというところになります。

飯尾：ありがとうございます。鈴木先生の昨日のご報告は、新たな提言でした。私としてはちょっとまだ漠としていてその具体像がなかなか見えないんですが、中国を中核とし、その周辺の朝鮮半島、朝鮮の国々をその周辺国家、日本をその周縁といいたいまいしょうか、辺縁という言葉で言われました。中心はあくまで中国にあるわけですが、その三層に分けるという考え方を提示されました。具体的にその関係というのは色々あるのだらうと思いますが、この東アジアを三層に区分するという考え方について、今日、李浩先生が唐代には、前後の王朝とは異なる特筆すべき国際化というものが現れてくるというご報告をされましたが、その文脈から、李浩先生は鈴木先生のこの三区分というものをどのようにお考えになったかということをお話しいただきたいと思います。

李：非常に価値のあるテーマだと思います。私の本来の専門は国際化を論ずるというより、中国の文化や文学のことを研究するものであります。だからこの一定の困難を伴うテーマは、反面非常に好きな討論テーマにもなります。ちょっと私の見方を申したいと思います。東アジアの地域で見れば、そのような三層構造ということが言えるのかもしれませんが、唐をめぐる問題をやはり世界史の場で見ていく必要が私はあると思うんですね。当時、長安が東にあるとすれば、ローマが西にあった。最盛期は同時代とは言い切れないのですが、そういったものがあった。その中

間に位置するのがイスラーム地域ですね。少なくとも世界の中では、大きな三つの中心があったと考えられます。もちろんイスラーム圏内、イスラーム地域の発達が遅れていたこと、それからローマ圏内が早かったこと、隋・唐期の中国が発展した時期にはローマ地域は衰退に向かっていったと思うのですが、世界史の大きな枠組みの中で見れば、やはりこの三つを中心とした地域から、東アジア史も見ていくのが必要ではないかと思います。たとえば、唐代における科挙制度、科挙の試験をペルシア人やインド人が受けに来て、合格して、唐朝の官吏になるということはほぼ無かった、あったとしたら大変なことなんですけれども。ただ日本や新羅の人々が科挙に合格して大官になるということは、皆さんもご存知の通り、いくつかの例が見られます。私が言いたいのは、そういったいくつかの大きな地域の中心が世界史上にあったということです。多少の最盛期のずれはあったとしても、一応あったということですね。ですから議論をする場合、ただ単にこの東アジアの朝貢体制の枠組みで見ていくというのは、私としては、いわゆる観点として広がり欠けるのではないかと思うんです。

飯尾：ありがとうございます。どうまとめていいかわからなくなりましたけれども、確かに世界史というのを標榜している以上はそこまで考えなければならないということは確かです。ただその中にもひとつの共通する社会というのか、世界というものが存在するのではないかという、そういう視点から私達はスタートしています。後でこのことは鈴木先生にひきとっていただいてまとめていただきたいと思いますが、その前に、三層構造、確かに昨日も結局それは中国中心主義じゃないかという議論が出てきたわけですけども、上から俯瞰してみると、三層構造というのは水面に石をぼんと投げて、三つの波紋がこうあったといたしますと、そこに朝鮮半島なりヴェトナムなり日本なりに、いわゆる小さな中華といいたましようか、小中華といわれているようなものが別の波紋を広げています。波紋が絡み合って複雑化しますが、小中華ということ随分前から主張されていらっしやまして、昨日も報告していただきました酒寄先生、ちょっとそのことについてご意見をいただきたいと思います。

酒寄雅志：昨日も議論があった、小中華という言葉があるかないかという、たぶん歴史用語としては無くて、これは、昨日も出てきましたが冊封体制論を西嶋定生先生が言われて、鈴木先生が紹介されましたが、そのあと旗田巍先生とか、鬼頭清明先生達がそれぞれの諸民族・諸国家の自立的な歴史というものをもう少し考えてみなければならない、そういう流れの一環として、石母田正先生が日本の国際意識において小中華ということを盛んに説かれました。私も石母田先生の本などを讀んだ時に、ああ日本には小中華、日本を中心とした世界観があるのだと思って、日本の専売特許みたいなのが小中華なのかと思って、周辺諸国家、百済・高句麗、特に高句麗などを見ていくと、濱田先生が早くから仕事をされていた広開土王碑の中などにも、自分を中心としたような世界観がうかがえてきました。それが新羅でも、たぶん日本でも渤海でも皆持っていて、それぞれの世界で自分を華として周りを夷とするような意識観念というものをそれぞれが持っていて、それらがまたぶつかり合ったりするところが、争長事件などの形で表現されてくる。そんなことをちょっと考えたりして、やはり、冊封体制というひとつの枠組みの中に、実は色ん

なそれぞれの世界観があるんだというようなことを思っずとやってきました。昨日、私がお話したことも、結局、渤海の遣唐使が唐へ行って、そしていろんな文物を、政治制度を持ち帰ってくるというのも、多分に自分たちの多民族国家、そして新しい、全くいままで国家というような統一的な組織ができてこなかった地に、唐の制度をいかにして有効に活用して、諸民族を支配していくのか。まさにそこに渤海王が中華の、小中華世界のですね、王として存立していこうとする、そういった関係が存在していたのではないかと思ったりしたわけです。そこから、少し冊封体制を打破できるような理解をしたいと思ったのですが、ヴェトナムなどをちょっと勉強してみると、またヴェトナムも南の世界帝国と言われるのですが、ちょっと異質のような感じもしましたので、やはり唐を中心としながらも、それぞれの地域、先程から国際化って話もあります、それぞれの地域の比較をしないと、東アジア世界とか、東アジアが見えてこないのかなと、だからもっといろんな人にいろんなことを聞かなきゃいけないなというように思ったりもしているわけです。以上です。

飯尾：どうもありがとうございました。話がうまくまとまらないのは何も司会の責任じゃない、と弁護していただいたようでとても嬉しく思います。その上で大変恐縮ですが、もう時間もあまりないのですけれど、鈴木靖民先生に全てをまとめていただきたいと思います。

鈴木：昨日の荒木先生みたいに長くなり過ぎではいけない。昨日だけじゃなくて今日は、もう少しやわらかな、どちらかという文化的な側面がクローズアップされるかと思っていましたら、大変細かい、そして特に李先生などからは論理的というか理論的なお話をうかがえて、ますますわからなくなってきた面があります。今特に議論的になっていることについて言いますと、私はいろんな研究を踏まえて、それは古代史に限らない、そして東アジアに世界という小宇宙があるとすれば、それは三層構造で、中核・周辺・縁辺が存在する。今日の報告でも文化的な、書物でも、あるいは道教の思想でも、やはり中核になるのは唐のような中国であって、そして周辺の、東アジアに限って言えば朝鮮半島の国々と、日本列島の違いは、やはりそのことと関係あるんだろうと思うのです。それから、なお付け加えておきたいのは、今の小中華云々の議論ですけれども、その周辺なり縁辺なりの、これは中国から見たらですよ、中核から見たら、そういう国もまた、歴史的な展開の中であるいは時代が経っていく中で、そこがやはり核になっていくということです。それは、昨日の資料で、穴沢啄光先生がすでに副次核という言い方をされているのが、それに当てはまるかなと思っています。時代は下りますが、私が近年関心をもっておりますのは、北東北・北海道の古代史です。北東北・北海道と、それから南の方では奄美中心なんですけれども、南の方の例で言いますと、奄美の喜界島でグスク遺跡群という本州とは言わないまでも、大宰府などと似た遺跡・遺物が出てきています。それからやがて、ご存知のように琉球国ができてきます。そのように、日本列島、広い意味の日本列島の中でもやはり違う副次核ですか、そういうものが違うところから出てくるということがあつた。小中華をそう言い換えることは可能かな、と思います。それから、今日のはうまく私とかみあうかなと勝手に思ったのは、李浩先生の説でして、外来文化といわば在来文化、ある一定の国なり地域なりの、導入というか選択っていう

ことを重視すべきだろうと思うのです。選択して、そして在来のものと、文化といっても制度も含めてですが、融合するというか、混交していくことを李先生は違う言葉で述べておられると思います。そして融合していつてできるのが、それぞれの地域や国の文化の創造といひましようか、文化形成です。この文化形成は絶えず繰り返されるということだろうと思うのです。時間の関係で仏教の例でみますと、ユーラシア規模では、中国の仏教も、もとはインドから入ってきたわけで、シルクロードなり南海を経て南北に入ってくると思います。そこで土屋先生のお話と関わると思いますが、やはり道教などと混交している、ということですよ。儒教などもある。儒教にはまた違う思想とか秩序があるわけです。今日の土屋先生の史料で見つけたんですが、『三国史記』の新羅本紀も儒教が盛んであるというのが大国かどうかのメルクマールになっているんですよ。『隋書』倭国伝の大国も同じだと思います。だから、中国に仏教の基本形があるわけではなくて、中国で既に仏教が変質している。中国に仏教を伝道した西域僧、それから漢訳僧、訳業僧、そういう人達、混血のお坊さんなどが伝道するわけですね。つまり、西の言葉もできるし、中国語もできる人達。その中国化したものが、南北の合流する形で百済に入ってくる。そこでも百済化する。もちろん高句麗や新羅の仏教の影響を受けつつ、お坊さんがやがて今度は日本に入ってきて、日本に適合的なものになる。これは建物を考えたらすぐよくわかると思うのです。施設、つまりインドなどだったら石窟ですよ。それからドーム型の仏塔があります。そういうものが中国に入ってきたら中国風の建築様式のお寺になってきて、これずっと中世鎌倉の禅宗の仏教なんかもそうですが、中国文化が入ってくるわけです。だから、日本はたぶん百済のそういう仏教施設の影響で塔や仏堂が入ってくるということになる。そういうことになると建築史の成果も借りなきやいけないということになってくるんですが。

そういうことで、結論はですね、冊封体制論をどうするんだって議論で終わりにしたいと思います。やはり昨日も言いましたように、国家の関係で冊封体制があるわけですから、あるいは権力間関係であるわけですから、これはちょっと無視できない。これを文化と分けて考えることは研究の上ではできますが、やはり不可分なところと分離可能なところとの両方がある。その中で、やはりその時々、王権なり国家のイデオログといひましようか、プレーンがいて、そういう人が中国なり朝鮮半島の文化を必要とし、それを必要とする人がいるということが大事だと思ひます。そのため渡来人などが日本の場合には受け入れられやすい、あるいは要請されているわけです。ということで、おおざっぱな見通しはつくのですが、李先生が仰ったように、確かに西の方にはローマがあり、それからイスラームがある。私もローマの遺跡を半年、一年近くフランスを拠点として見て歩いて、いつもそういうことを考えておりましたので問題意識としては持っています。ただとりあえず、この専修大学が一番最先端を行ってると思われる、古代の、いわゆる古代の東アジア世界というものがあるのかどうか、私はあった方がいいと思ひていますが、それを絶えず歴史事実にてして検証し直しつつ、やはり理論化といひましようか、歴史の概念化とかカテゴリー化していかなければいけない、理論化していけないといひましようか。まとめになります、それでいろいろな歴史モデルといひましようか文化モデルをつきあわせればいいのかではないでしょうか。

飯尾：どうもありがとうございました。もう本当に45分を過ぎてしまいまして、申し訳ありません。これで終わりたいと思います。

土生田：二日間にわたってどうもありがとうございました。本当は代表の荒木がおりますので、こちらで挨拶すればいいのですが、昨日と同じように長くなりますので、私がここでお礼を申し上げます。